

Title	先土器時代の微細遺物：特に小石片検出の意義について
Sub Title	Micro-chips and their archaeological implications ; an example from Hakeue (はけうえ) palaeolithic site
Author	阿部, 祥人(Abe, Yoshito)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.73(237)- 82(246)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

先土器時代の微細遺物

—特に小石片検出の意義について—

阿部 祥 人

目次

I はじめに

1 エラーか不可抗力か

2 本稿の目的

II 方法

III 遺物集中部におけるチップ類の分布

1 検出されたチップ類

2 遺物集中部の特徴

3 チップ類の分布状態

IV チップ類検出の意義

V おわりに

I はじめに

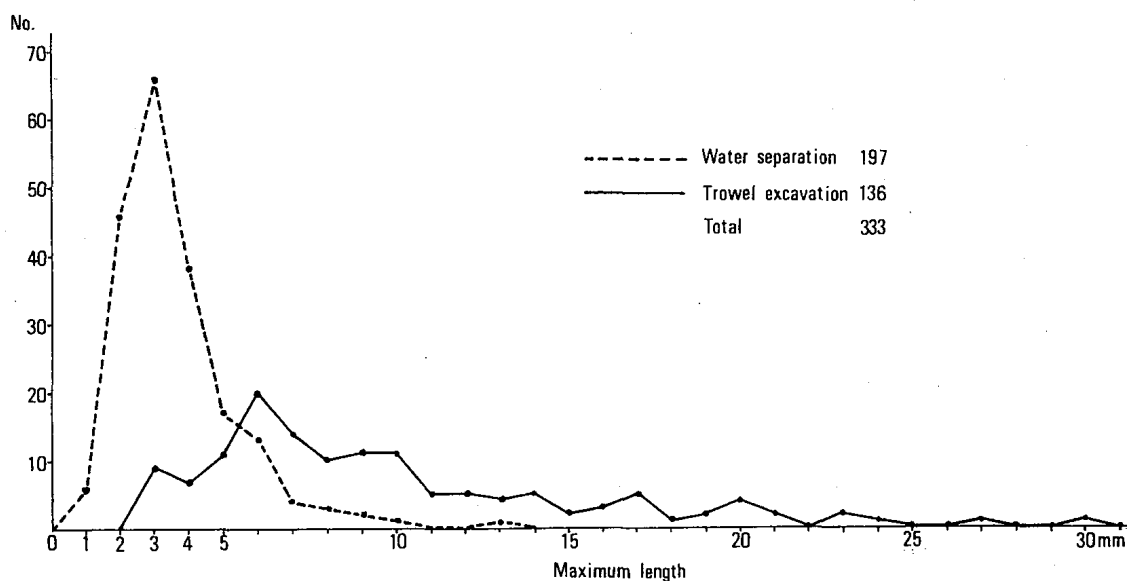
1 エラーか不可抗力か

東京都小金井市にある「はけうえ遺跡」の調査では、縄文時代

先土器時代の微細遺物

の多くの住居址やそれに伴う豊富な遺構・遺物が発掘され、その後、さらに下部の関東ロームの各層位の中からも、先土器時代の大量の資料が得られた。

この先土器時代の調査が開始されてまもない頃、すなわちローム層の最上部を発掘している際に、黒曜石製の槍先形の「尖頭器」を中心にこれと同石質の剝片や小石片（チップ類）が径1m程の範囲にまとまって発見された（小田・阿部・中津一九八〇P38）。こうした出土状況での発掘者は、いかなる細かなチップ類も逃すまいと細心の注意を払って、数ミリずつ削るように調査を進め、本来遺跡にある石片のほとんどが発見、採取されているものと信じる。しかし、一方では最大長が1cmにも満たず、しかも薄いチップ類が中心に分布しているため、その場における資料が完全に採取されたかどうか若干の不安があることも否めない。そこで、一つの試みとして本来は発掘時に捨てられる排土を網目1mmのふるいにかけて、通常の発掘方法で微小なチップ類がどの程



第一図 二つの方法によるチップ類の最大長別検出数（『はけうえ』 Fig. 349を基に作成）
 実線—調査時の発見資料、破線—水洗のふるい作業による検出資料

度もれているかを、この遺物集中部で調べてみた。

その結果は、第一図にチップ類の最大長別に検出数を示した如くである。すなわち、この遺物集中部から最終的に採取された総計333点の資料のうち、60%は調査時には発見されず、特に5mm以下では85%がふるいにかけて、はじめて検出されているのである。しかもこれは筆者を含めた、目と腕に自信のある数名の調査者が、ここに微細なチップ類が密集していることをすでに知った上で精査した結果である。

この事実は何を示すのであろうか。その一つは、微細な遺物の発見もれば、我々の自信や予想をはるかに上まわる高率で生じ、軽視しがたい割合であるという点である。さらには、こうした微細な遺物の検出もれば調査者の注意力や経験の不足等に起因するサンプリングエラーではなく、むしろ遺物を包含するローム層が硬く、しかも粘性に富むために生じる不可抗力ともいふべきものであるという点である。

2 本稿の目的

このような事実の判明を契機として、はけうえ遺跡の先土器時代調査の後半では、できるだけ多くの遺物集中部での、ふるいによる微細遺物の採取が試行された。そこで得られた資料は発掘時点に採取される石器・礫及び炭化物片という三種と同様な材質の微細なかけらである。こうした全資料に関する分析は、まだその途上にあるため、ここでは、そのうち石器と同材質の小石片——本稿ではチップ類と呼ぶ——に対象を絞り、その検出結果、特にその平面的な分布状態について検討を加える。それによって、先

土器時代という、以後の新しい時代に比して、遺跡に求められる情報が量的にも質的にも乏しく、しかも遺物の種類も石製品に主体がある時期の遺跡調査において、微細なチップ類を検出、あるいはその有無を確認する意義を指摘したい。つまり、本稿の主眼は、主に石器の分布状態の分析を基にして遺跡における当時の活動の復元を行うに際して、通常の発掘方法では採取しがたい微細な資料についてのデータを加えることによってそれがどのような効力をもち得るかを示すことにある。

II 方法

微細遺物検出のための土壌採取と検出作業は次のような方法で行った。

石器や礫などが十数点以上まとまって出土する遺物集中部⁽¹⁾が発見されるとその範囲を50×50cmの区画で平面的に区切る。そして、遺物が最も多く出土する深さ、つまり遺物の垂直的分布の中心と思われる面から、通常は排土として廃棄される土壌を4cm毎の厚さで採取していく。したがって50×50×4cmの土壌が一単位として一つの袋に収納されていくのである。なお、本稿に用いたデータは垂直方向では一段のみ(4cm)の採取によるものである。次にこれらの土壌をふるいにかけるわけであるが、冒頭に示した例などを参考にして、網目のサイズは1mm四方を選んだ。さて、この1mmの網目でローム土壌をこすにはかたまりが大きすぎるため、水で溶かす方法をとったが、それでも、水を含んで粘性を増したロームのかたまりがふるいの網目をふさいでしまう。そこで

先土器時代の微細遺物

想定される微細遺物資料のうち、若干の力を加えてもこわれないと判断される石製の遺物に採取の主目的をおくことにし、ブラシでこすりながらロームを溶かしつつ作業を進めた。

こうしたふるい作業の結果、1mmメッシュにかかった物をすべて一単位毎に乾燥させ、その中からローム層中に含まれている自然の小礫等を取り除き、材質別に分類を行った。

III 遺物集中部におけるチップ類の分布

1 検出されたチップ類

以上のような方法で採取された微細遺物のうち、ここで扱うチップ類とは、その層位中で発見される石器と同様の黒曜石、チャート等の石質のものとし、他の石質のものは礫片と呼び區別した。

このチップ類の概要は次のようなものである。大きさは最大長を計測して約1mmのものから、まれに10mm以上のものが検出され、最も多いのは5mm前後の資料である。また形態は多種多様である。しいて石器での分類方法と同様の観点で分けると、加圧面、加圧点及び主剝離面などをもつ、いわば微細剝片と、そうした剝離の際の技術的な特徴が明瞭には認められないもの、いわば、微細碎片とに分類できる。こうした二つの傾向はチップ類の石質や大きさ及びその遺物集中部に含まれる石器との興味深い関連を示しているため、今後、これらの点の分析も当然必要とされるものである。

2 遺物集中部の特徴

検出されたチップ類の分布状態の検討に入る前に、まず、微細遺物検出のために土壌を採取した場所、すなわち石器や礫の集中している部分を、主にその遺物組成から分類し、チップ類検出結果を含まない段階でのその場の大まかな特徴にふれておきたい。

はけうえ遺跡の遺物集中部のうち本分析を試みた部分を、遺物分布域の大きさや石器と礫の組成比等で分類すると次のようになる。⁽³⁾

A型—石器と礫が多数複合している大規模分布域

(V-10、V-11、X-1)⁽³⁾

B型—石器と礫が少数ずつ複合している中規模分布域

(IX-4、IX-5)

C型—石器が主体を占める小規模分布域(III-7、VI-2)

D型—礫が主体を占め大形礫を数個含む小規模分布域

(V-3、VI-1、VII-5、VII-7、IX-8)

A型では径約5m程の範囲に石器及び礫がそれぞれ数十点ずつ含まれ、それらが複雑に混じり合った状態で分布している。石器の種類や石質も複雑で礫の形態や大きさも多様である。B型は、A型よりやや小さな範囲に十前後ずつの石器と礫が含まれる。石器は少数ながらその種類や石質は単純ではない。

C型は径約1〜2m以内の範囲に石器が中心となって集中しているもので、礫は含まれないか、ごく低い割合しか占めないものである。D型はC型同様の小規模な分布域で、その遺物の中で最も目立つのは、最大長20cm程の大形礫が数点含まれている点である。また、その周辺に若干の小礫や石器が分布している。所謂、

配石と呼ばれる部分である。

3 チップ類の分布状態

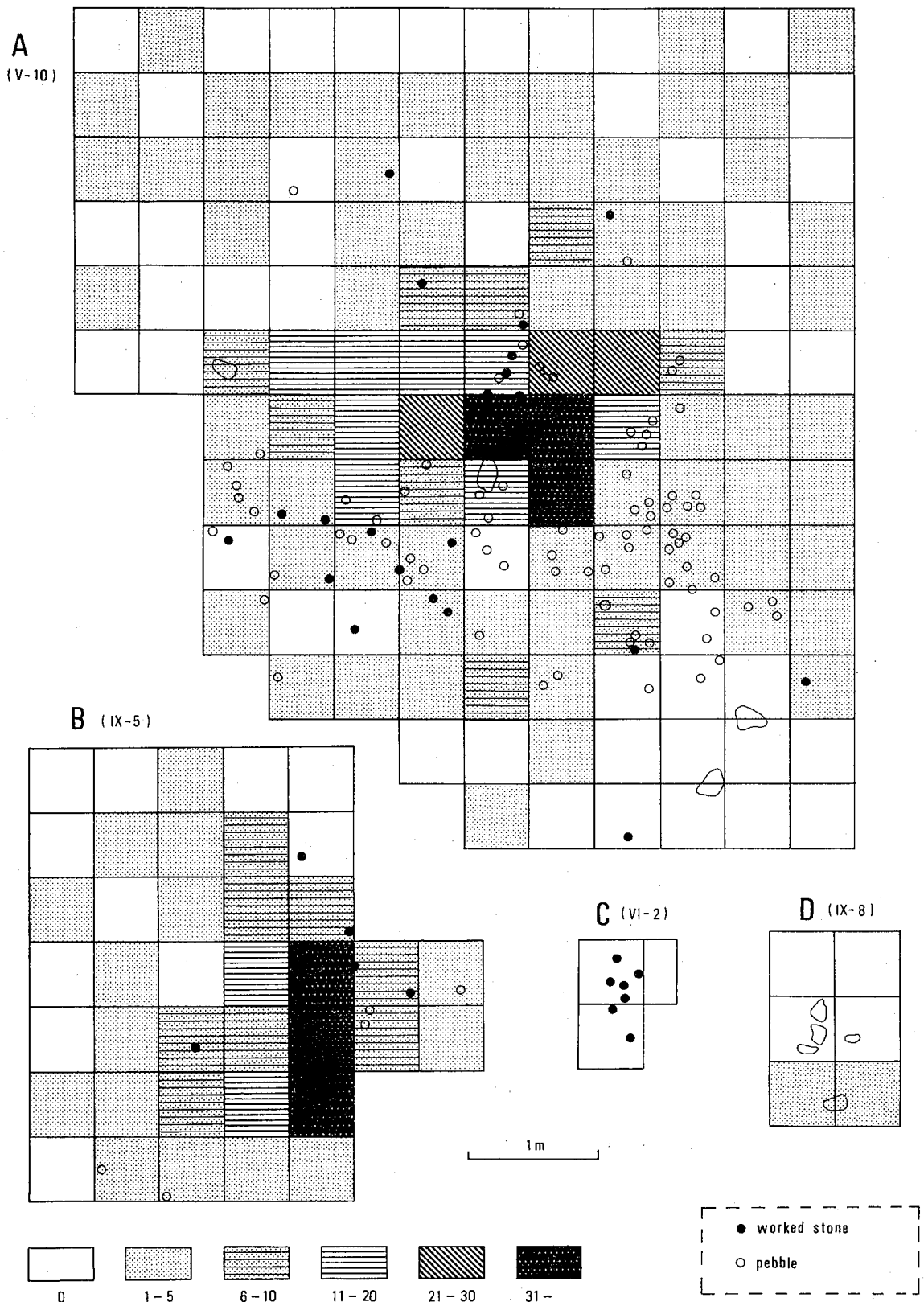
はけうえ遺跡の合計12ヶ所の遺物集中部におけるチップ類の検出結果のうち、土壌採取の単位となった一区画毎の検出量からみた結果の概要を以下に記す。⁽⁴⁾

まず、先に分類した4つのタイプの遺物集中部のうち、A型の集中部では、検出を試みた3つの集中部のいずれにおいても、総計数百点に及ぶチップ類が検出されている。これは、それぞれ調査現場で発見された石器資料数の10倍を越える量である。そして、分布状態の共通した特徴は、一区画内に30点以上を含むところが2・3区画あり、これを中心としてその周辺で分布密度が高く、その部分を離れるにしたがって検出量が減っていくという点である。つまりA型の遺物集中部には、直径1m程のチップ類集中の強い核があり、まわりの区画に向かい、その数が漸減する分布状態を示しているのである(第2図A)。

B型の二つの遺物集中部では、それぞれ異った分布傾向が認められた。その一つは、先のA型と同様に約1mの範囲に強い分布の核をもつチップ類の密集状態を示すものである(第2図B)。

この例では、通常の発掘方法で得られた石器資料数に対し、1mm網目のふるいによってはじめに発見された微細なチップ類がおよそ50倍もの量となる。もう一方の傾向は、これとは逆にチップ類の検出量がどの区画でも皆無か一〜二点という状態のものである。

次のC型の遺物集中部、すなわち石器類を主体に比較的小範囲



第二図 各種遺物集中部におけるチップ類分布状態（『はけうえ』Fig. 350-352を基に作成）

に集中してみつかる部分においても、B型の場合と同じく二つの分布傾向である。まず、チップ類の強い密集状態を示す分布例は、冒頭に紹介したⅢ-7という集中部である。そこでのチップ類検出の土壌は試験的な採取であったため、他と同じ統一的な区画ではないが、採取範囲の中心部とその周辺の土壌での検出量から、A型で認められた密集部分と同様の分布状態と判断し得るものである。また、もう一ヶ所(Ⅵ-2)での検出結果は、興味深いものである。ここでは、同一母岩から作り出されたと考えられる大形の剝片類7点が約50cmの範囲にまとまって発見されているが、その近くでは、チップ類が一点も検出されなかったのである(第2図C)。

最後に、D型の場合はどうであろうか。合計5ヶ所のD型遺物集中部での検出結果では、いずれの集中部においても、A型で認められたような強いチップ類集中の核はない。また、5ヶ所のうち3ヶ所では5点以上のチップ類が検出された区画がなく、しかも、検出数がゼロの区画が顕著である。そして、残りの2ヶ所では、いくつかの区画に5点以上の検出が認められたが、密集の状態はなかった(第2図D)。

以上のような、チップ類の分布状態に関する結果を、遺物集中部の4つのタイプ別にまとめて示したのが、第一表である。この表中、◎印で示した遺物集中部は、チップ類検出総数が数百点と多量で、なおかつ一区画内に30点以上検出されたところが複数区画あり、その部分がチップ類集中の核を成している状態のものである。×印は、チップ類検出数ゼロの区画が多く、若干数検出さ

第一表 遺物集中部のタイプとチップ類検出状態

遺物集中部のタイプ	チップ類検出状態のタイプ				
	(V-10)	(V-11)	(X-1)		
A 型	◎	◎	◎		
B 型	◎	×			
C 型	◎	×			
D 型	△	△	×	×	×

() 内は、はけうえ遺跡の石器・礫集中部の番号

れた区画があっても、すべて、5点未満という分布状態のところである。また△印は、×印のところよりはチップ類検出数はやや多いが、5〜10点検出の区画がわずかに認められる程度で、×印の場合と同様1〜2点のみ検出された区画が大半を占める遺物集

中部である。

このように、各遺物集中部は、チップ類の分布状態の結果に基づいて、◎印で示した密集部をもつ「多数検出型」と、△印及び×印で表示した、密集部のない「少数検出型」とに大別できる。そして、遺物集中部のタイプとの関係を見ると、A型の遺物集中部ではすべて◎印タイプのチップ類分布状態、BとC型では◎印及び×印の各一ヶ所ずつに分かれる。そして、D型では◎印タイプはなく、すべて×印と△印の分布状態のみである。

IV チップ類検出の意義

ここでは、主に前章で導かれたようなチップ類の分布状態に関する結果に若干の検討を加え、本方法の意義についてふれてみたい。

まず、得られた結果で特に重要な事実の一つは、遺物集中部が、径約1m程のチップ類密集部を分布の核とする多数検出型と、その傾向が認められない少数検出型とに大別される点である。これは、チップ類の分布状態自体が、その場における当時の人間の行動の差を反映しているもの、と言える。さて、そこで問題となるのは、チップ類が彼等のいかなる活動の所産なのか、という点である。

石器に関する、製作から使用そして埋没、発掘までの過程の中で、微細な石片が多量に生じる可能性があるのは、製作及び使用の段階である。そして、ここで分析したチップ類の形態、それに石器の種類と刃部の形状等から判断すると、これらは石器の使用

先土器時代の微細遺物

時に生じたものというより、むしろほとんどが製作時に飛び散ったものである可能性の方がずっと高い。黒曜石やチャート等の母岩に打撃を加え、単純な形の剝片を作り出すだけでも、多数の小石片が同時に生じることは石器作りの簡単な実験からも十分理解し得る事実である。そして、精巧な大形石器（ハンドアックス）を作る場合では、一個の製作にあたり1mm網目にかかったものだけで実に5,000点に近い石片が副産物として生まれるというデータもある（Newcomer 1971, p.90）。このようなことから、検出されたチップ類のほとんどは当時の石器製作行動によって生じたものと考えるのが妥当であると言える。

次には、多数検出型の中に認められるチップ類密集部をどのように考えるかが問題になる。その場の解釈に関しては、二通りの推測ができる。第一は、「その場で石器作りが行われた跡」、そして第二は「他の場所で行われた石器作りの副産物をまとめて捨てた所」である。こうした点についての検討は、遺跡内で発見された遺物相互の関連や地形との関係等も含めて総合的に行う必要があり、分析が未だその段階にない現在、いずれかという断定は避けざるを得ないが、その可能性を指摘するに十分な知見はそろっている。すなわち、チップ類集中部においては、これらと同材質の完成品や加撃具と思われる石器が発見される場合が多い点等は、その場自体が石器製作の場であり、副産物のみが移動したという状態ではないということを示している、と言える。チップ類の密集部は当時の石器作りの具体的な場所である可能性が非常に高いのである。

さて、以上のような問題点の整理の上で、はけうえ遺跡でチップ類採取を行った4種の遺物集中部の「場」がもっていた機能に關して少しく推定を試みる。

比較的広い分布域と豊富な遺物組成をもったA型の場合は、前述のようにチップ類も多く、その密集した分布の核が各々一ヶ所ずつ認められている。この種の分布域の解釈に關しては、遺物内容、例えば石核及びそれと同一母岩の剝片との關係等から、チップ類の検出結果なしでも石器製作活動を含んだ跡であるという判断ができることが多い。しかしながら、多量のチップ類検出によって、この判断がより確実なものとなるのである。また、さらにはその遺物分布域全体の中での製作場所のより具体的な「地点」までの推定も可能になるのである。そうした意味で、チップ類検出の結果、その分布に強い集中部が確認し得ることの意義は小さいくない。

次に遺物集中部とは呼んでも、その数量が少ないB型でのチップ類分布に關する結果は、対照的な二つの傾向に分かれた。すなわち、一方の場での活動は石器製作行動を含み、もう一方での活動には、それを含まないという可能性を示しているのである。しかもそれは、それぞれの遺物内容の分析から得られる情報以上に具体性があり、明確な結果である。

また、石器類を主体として小範囲に遺物がまとまっているC型の二例での結果も、B型と同様、その場における石器製作行動の有無をより具体的に示しているものと言える。特にこの二例での石器類は他種の石材の混入がほとんどなく、同一母岩から生じた

と判断できる資料が主体である。したがって、一方(Ⅲ-7)は同一母岩からの連続的な石器製作行動を反映しており、また他方(Ⅵ-2)は、その遺物集中部で製作が行われた可能性のないもので、遺物(剝片類)の大きさ及び形態等の特徴が互いによく類似していることからみても、他所で作られた石器がある意図のもとにまとめておかれた場所、しいて言えば「デポ」に類したところではないかという推定が成り立つ。

大型の礫を主体とするD型において、その中心的役割りをもっていたと考えられる大礫自体は、大きさや形状のみから判断すると石器製作台(Arrow)とも想定できるものもある。しかしながら、はけうえ遺跡のこのD型5ヶ所での結果は、少なくとも、こうした大礫の発見された場所が石器製作の行われた所と判断できるチップ類の分布状態ではなかったのである。

このように遺跡での発掘時には細心の注意を払っても採取困難なチップ類を検出し、単にその分布状態を確認することによっても、石器製作を行った具体的な「場」を求める有力な手掛りが得られるのである。またこれによって、ある遺物分布域が石器製作行動の結果をもつか否かの検討も可能となり、その遺物群と分布域に對する考古学的な解釈の幅を大きく絞ることができるわけである。

さらに、本方法による研究作業を、チップ類自体の分析に向け、共存する石器類との關係等の検討を進めれば、その遺物群に關する製作技術その他の研究上、貴重なデータが得られることは言うまでもない。

V おわりに

我国における縄文時代以降の各種遺跡・遺構からの微細遺物の検出とその分析は数年前より本格的に開始され（森井一九七五、鈴木・小宮一九七七他）、その後も着実に成果をあげつつある。

ここで扱った「はけうえ遺跡」での分析は、先土器時代の調査では初めての試みであり、未だその緒にいたばかりである。したがって、ひとつ方法上の問題をとってみても今後検討を要する点は少くない。たとえば、大きな問題点の一つは、土壌の採取から、微細遺物の検出までに時間と労力が多かることである。これについては、土壌採取方法、特に位置や量及びその簡略化が可能な吟味など基本的な諸点も含まれている。

しかしながら、前章までに成果の一部とその意義を示した如く、本方法による結果は、先土器時代遺跡における当時の人間の活動様式を復元するための、きわめて重要な情報になり得るのである。しかも、その資料は、通常の発掘方法のみでは、ほとんど採取できず、調査時に消滅してしまうのである。

これを踏まえ、前述のような諸問題を解決しつつ、先土器時代遺跡における微細遺物を検出し分析する意義の大きいことを、最後に再び強調して、稿を終える。（56・11・30稿了）

謝辞

本研究法の発想と視点は、慶応大学在学中、清水潤三教授及び鈴木公雄教授をはじめとする考古学研究室各位の御指導による

先土器時代の微細遺物

塚調査の中から生まれたものが多い。また、これを先土器時代遺跡調査に応用し得たのは「はけうえ遺跡調査団」各位の御援助によるものである。記して感謝申し上げる次第である。

註

(1) はけうえ遺跡における遺物集中部については、一石器・礫集中部」の呼称を用い、これを定義してある（小田・阿部・中津一九八〇、P13）。

(2) 本遺跡をはじめ先土器時代の重要な遺物集中部の形態として、焼けた小礫等が十数点以上密集した所謂「礫群」がある。今回はこの部分や周辺での採取分析は行っていない。今後、礫群を含んだ部分でも本方法を試みることによって、炭化物片や被熱の際生じるような礫片との関係から、新しい知見が得られる可能性がある。

(3) 遺物集中部の番号。最初のローマ数字がルームの自然層序。次のアラビア数字がその層位の中の集中部の番号である。

(4) 一区画毎の検出量の全結果は、前掲はけうえ遺跡報告書、第七章『微細遺物』先土器時代（阿部祥人・山下秀樹）の節（PP398～401）に記載。

文献

小田静夫・阿部祥人・中津由紀子（一九八〇）『はけうえ』

鈴木公雄・小宮孟（一九七七）「貝塚産魚貝類の体長組成復元に
おける標本採集法の影響について——特にクロダイの体長組成

「ついで」 第四紀研究192, PP71~75

Newcomer, M. H. (1971) "Some quantitative experiments
in handaxe manufacture", *World Archaeology* No.3,
PP.85~94.

森井美智子(一九七五)「ウォーターフローテーション・セパレ

ーションによる微細遺物の再生」『中山谷遺跡』PP85~98